

『樂寂靜・不念』

典座教訓（講談社学術文庫 p33）より

先來云う、「典座は絆を以て道心と為す」と。

如し米砂誤り淘げ去くこと有らば、自手ら換点せよ。

『清規』に云う、

「食を造るの時、須らく親しく自ら照顧すべく、自然に精潔ならん」と。

其の淘米の白水を取りても、亦虚しくは棄てざれ。

古来、漉白水囊を置く。

粥の米と水を并じ、鍋に納れ了らば、心を護持に留めて、

老鼠等をして触誤し、並に諸色の閑人をして見触せしむること莫れ。

正法眼蔵 八大人覺（岩波文庫 水野弥穂子訳）より

諸仏は是れ大人也。大人の覚知する所、所以に八大人覺と称ず。

此の法を覚知するを、涅槃の因と為す。

三つには樂寂靜。諸の憤鬧を離れ、空閑に独処するを、樂寂靜と名づく。

のたまわ なんだちびく じゃくじようむい おも まさ かいによつ
仏言く、汝等比丘、寂靜無為の安樂を求めんと欲はば当に憤鬧を離れて独

げんじ じようじよ たいしゃく きようじゆう
閑居に処すべし。静処の人は帝釈諸天、共に敬重する所なり。

こしゆたしゆ くうげん
是の故に当に己衆他衆を捨して空閑に独処し、苦本を滅せんことを思ふべし。

も ねが しゆのう たと これ
若し衆を樂はん者は、則ち衆悩を受く。譬えば大樹の、衆鳥之に集まれば、則ち

こしゃく うれい ぼくじゃく しゆく もつ
枯折の患有るが如し。世間の縛著は衆苦に没す。

たと あた おんり
辟へば老象の泥に溺れて自ら出ること能はざるが如し。是れを遠離と名づく。

ふもうねん ま しゆじようねん
五つには不念、亦た守正念と名づく。

法を守つて失せざるを、名づけて正念と為す。亦た不念と名づく。

のたまわ なんだちびく ぜんちしき ぜんごじよ
仏言く、汝等比丘、善知識を求め、善護助を求むるは、不念に如くは無し。

も もろもろ ほんのう ぞく あた
若し不念有る者は、諸の煩惱の賊則ち入ること能わず。

なんだち おさ しん あ
是の故に汝等、常に念を擗めて心に在らしむべし。

もろもろ
若し念を失せば則ち諸の功德を失す。

ねんりきけんじう いえど
若し念力堅強なれば、五欲の賊の中に入ると雖も為に害せられず。

たと よろい き おそ
譬えば鎧を著て陣に入れば、則ち畏るる所無きが如し。

是れを不念と名づく。